



この度松山会長の後を受け、日本膜学会の会長を務めることになりました。1978年に発足した膜学会は、すでに40年以上の歴史を誇る伝統のある学会です。当学会の最大の特徴は、人工膜と生体膜の研究者が一堂に会し、その融合を目指して切磋琢磨する基本理念にあります。この考え方は、他国の膜学会にはない日本独自のものであり、この理念を大切に、本学会のさらなる発展と活性化を目的に当学会を運営していきたいと考えています。そのための具体的な抱負を下記のように4つ掲げました。

### 1. 人工膜と生体膜の融合の促進

私自身は、1989年に液膜（Liquid membrane）による金属分離で学位を取得以来、膜学研究に携わってきました。しかし、高分子や無機の硬い膜を使用したことがなかったため、膜学会では、境界領域の分野で仕事をして参りました。本来液膜は、Biomimetic Engineering（生体模倣工学）を実現する道具として利用されてきましたので、まさに境界領域は、人工膜と生体膜を融合した典型的な研究分野だと思えます。本学会では、年会のシンポジウムや膜誌の特集号を利用して、人工膜と生体膜を繋げるような境界領域の活性化をはかりたいと考えています。そのためには、エマルション、ミセル、リポソームおよびゲルなどの素材を使って医療や創薬の分野で活躍をしている人たちが参加しやすい環境を整えたいと考えています。

### 2. 産学連携の強化と産業部門の活性化

一般に学会というとアカデミア（大学の研究者）の集まりと思われがちですが、膜学会には、現在多くの企業研究者が参画しています。これは、本学会に産業部門委員会が設置された点が大きいと考えています。この考えを大切にし、さらなる活性化を図ることが重要です。これまで、年会やシンポジウムにおける企業からの発表は限られていましたが、昨年の年会で企業セッションが設置されました。さらに、2019年の年会では、新たにフラッシュプレゼンテーションの機会も設けられ好評でした。この流れを大事にし、さらに工夫を凝らして、多くの企業研究者が喜んで参加いただける膜学会にしたいと考えています。本件は、産業部門としっかり連携をとって、アカデミアおよび企業会員の双方に有益な活動に発展させたいと思いますので、皆様のアイデアをお聞かせくだされば幸いです。

### 3. 学会誌「膜」のOpen Access化の促進とHPの充実

本会の「膜」誌は、これまで編集委員の皆様のご尽力で、大変魅力ある雑誌となっています。なかでも昨年来、期間限定で行われてきた原著論文のOpen Access化によって、原著論文へのアクセス数も飛躍的に増加しました。そこで、この原著論文のOpen Access化は、本年も引き続き継続します。一方、総説などの記事は、現状では5年後に公開となっています。膜誌では、これまで多くの優れた総説が発表されています。特に、毎月のアクセス数ランキングを見ているとその上位は、生体膜系の過去の総説が多くを占めていることがわかります。このような総説誌としての機能は膜誌の最大の特徴ですので、このような総説記事も、1年後には誰でも見れるようにするのが良いのではないかと考えています。本学会では、情報発信の強化のために情報委員会が設置され、本会のHPはかなり充実してきました。本年度からは投稿システムも整備され、さらに便利になりました。最終的には、膜のことなら膜学会のHPにアクセスすればすべて情報が手に入るようなHPが理想だと考えられます。

### 4. 若手の人材育成とシニア世代の活用

2017年に若手の活躍を後押しする目的で若手の会が発足しました。それ以降、年会・シンポジウム前後での研

研究会等が開催され、その活動も活発化しています。本年の膜誌の3号では、若手の研究者の特集号も組まれました。いずれの学会も団塊の世代の引退に伴い会員の減少が目立ってきており、次を担う若手の育成が急務となっています。本会も若手の育成のためには予算をつぎ込んで、若手の人材育成に注力したいと考えます。一方で、定職を引退されたシニア世代の活用も重要と考えます。膜誌を利用して、これまでの貴重な知識や経験を次の世代に残して頂くことも一案かと思えます。いずれにせよ、若手の活性化策ならびにシニア世代を活用した新たな企画などを計画したいと思っています。

最後になりましたが、長い歴史と伝統のある日本膜学会の会長の重責が私に務まるか不安に思うことも多々ありますが、皆様と一緒に本会の発展に尽力していきたいと思っておりますので、どうか強力なご支援をお願い申し上げます。